

精神とは何か？ 精神的存在に対する物理学

What is the Spirit? Some Physics of Spiritual Existence

デイビッド・バートン (David Burton)

化学科助教授、研究室長

ブリッジポート大学 (University of Bridgeport)

コネチカット州 (Connecticut) , USA.

## 1. 序説

この会議のテーマは科学の統一を扱っている。統一思想(Unification thought)は共通目的を持った多くの異分野を統一するという役割を演じてきたが、私にとって特に重要なことは、自然科学と神学を出会わせたということである。通常我々が宗教と科学のことを同時に話すとき、最初に心に浮かぶものは創造か進化かという進行中の論争である。知的デザイン(Intelligent design : ID)についての議論がこの分野で現在さかんに行われている。しかし、宗教と自然科学の間には根本的な断絶があり、生命の進化における目的とか知的介入者についてのいかなる議論よりもはるかにこの分裂は実質的なものである。

西洋キリスト教における精神についての哲学的伝統は、プラトンが存在物を形相(form)と質量(matter)に分けたことに由来する。(1) ここで、質量とは連続した材質を持つ存在物としての「物(stuff)」であり、形相とは存在物の持つ無形で非物質的なアイデアとかパターンとかである。プラトンにとって、形相は物質的な存在物自身とは独立に存在するものであった。人間についてプラトンは、形相は心や魂と等しいものとしたが、この考え方は定着してしまった。その時以来、精神の概念は無形の心の概念と結合され、精神についての西洋キリスト教的な共通の考え方となった。この種の無形の存在物に関する存在論的意義は、精神はなんら空間的な広がりや量を持たないということであった。こうして精神は感知できない、分けられないものであり、自然科学の視点からはエネルギーのないものでなければならなかった。こうして、人間は無形の心あるいは精神と物質的な体との二元性を持っているという考え方になってしまった。このような考え方は非常に強いものなので、この二元性を否定することは、一般に宗教の拒否であると思われる。唯物論というレッテルがはられてしまうのである。

自然科学は多くの人達(卓越した科学者を含めて)によって基本的に物質主義であると考えられているが、実際には哲学的物質主義であるというよりはむしろ方法論的物質主義であると言える。これは自然科学の基礎となる仮定が機能しているということであり、科学的な方法が働いているということである。(2) とりわけ科学的方法には、独立した実験的検証が繰り返し可能であることと、実験を理論的に正しく説明できることの両方が必要である。この理論と実験による検証が必要であるということは科学的な説明力の鍵となっているが、物質における効果から直接的あるいは間接的に観測される事

柄についての説明には限界がある。こうした実験的検証は、物理的な存在物を取り扱う上では自然科学の方がはるかに神学や哲学よりも優れているのであるが、では精神的存在についてはどうであろうか？ 精神がエネルギーのない無形の心であるという伝統的な概念からすれば精神は絶対に検知できるものではないということになり、原理的に科学はもはやこの論題を取り上げることすら出来ないことになる。精神が存在するという概念を完全に否定できるものではないが、同時にそれを証明することも出来ないということになる。こうして、宗教（キリスト教）と科学はこの時点から完全に分断されてしまっているかのように思われる。

この突破口が、統一原理 (Divine Principle) と統一思想、とりわけ統一原理にある。後で考察する人間の構造について、統一原理は霊人体(spiritual body)があることを提唱している。伝統的な考え方では、精神(spirit)と物体(body)とは互いに相容れない存在である。物体とは、空間的広がりや、量、可分性を持つものと定義され、物理的に存在する伝統的な物質を意味している。統一原理が提唱する霊人体は、伝統的な考え方を打ち破り精神が意味するものを再定義しているが、宗教と自然科学の間の存在論的なギャップを橋渡しするための種となるものを提供している。以下に、この点についての若干の考察を述べ、精神的存在の性質について1つの提案をする。そうすることによって、物体の概念を精神的存在に応用することによって生じるいくつかの概念的な問題を解決する。

## 2. 精神的存在(spiritual existence)

統一原理(Divine Principle)によれば、創造された宇宙は人間の姿に似せて霊的領域(spiritual realm)と物質的領域(physical realm)からなっている。(3) 人間の構造は霊人体(spiritual self)と肉身(physical self)からなっており、それぞれが心(mind)と体(body)の要素を持っている。(4) すなわち人間の基本構造として、生心(spirit mind)、肉心(physical mind)、霊体(spirit body)、肉体(physical body)の4つの部分からなっている。すでに示したように、霊体の考えは、伝統的な西洋の考え方とはかなり異なっている。つまり、西洋的考え方は、物質世界に対する形や量、可分性、空間的広がりといった性質に限られているからである。しかしながら、統一原理においては、無形実体世界を知覚することができる霊的五感があることから、霊人体の概念はかなり重要である。統一原理では、人間の構造についての基本的な記述をした後には、その概念を明らかにすることもなく、

霊体の意味するものについてや、それがどのように存在するのかについても説明していない。

統一思想での状況はもっと明確ではない。これは統一思想が実存体と神を取り扱っているからであって、直接霊的な存在を扱っていないためである。存在論は神の存在と物質的領域についての性質に限定しており、精神については認識論の概念の中で扱っているだけである。それにもかかわらず統一思想要綱(Essentials of Unification Thought) では人間について以下のような基本的記述がある：

『人間の性質には4つの種類の性相(sungsang)と形状(hyungsang)がある。第1に、1人1人の人間は万物を総合した形象的存在である。我々人間は動物界、植物界、鉱物界の性相と形状の要素だけでなく、人間に特有な性相と形状の要素すなわち、生心と霊体を持っている。第2に各人は心と体が1つになった存在である。そして第4に、それぞれの人間は生心と肉心からなる二つの心を持つ存在である。』(5)

この内容から性相と形状とは、すべての存在物に適用できる基本的な存在論的特徴であることがわかる。性相と形状は、しばしば内的性質 (internal character) と外的形相 (external form) と訳され、もっとも基本的には人間における心と体の関係に相当する。(6) こうして、いくつか異なっているが関連した視点から、すべて性相と形状の関係という一般的範疇の下で人間を見ることができる。これらの中で最も重要なことは、4つに折り畳まれた構造を異なった視点から見るということである。つまり心と体という見方、あるいは、霊人体と肉身という見方から人間を見ることができる。

統一思想にも霊体という言葉が使われているが、統一思想は全体としてその概念を含んではおらず、本質的にそれについて述べていない。どちらかと言うと、李(Lee)によって述べられた基本的な構造は伝統的な西洋的パターンを具体化しているように思われる。(7) このような観点からは、心(おそらく意識)と体としての性相と形状は、2つの異なったもののように見られてしまう。性相と形状は、西洋的な思想概念である精神と物質のような霊的な心と物質的な体と考えられてしまう。(8) こうして、人間の構造は伝統的な心と体の二重構造に還元されることになる。ここでの心とは、精神的な心と肉体的な心の関係から導かれる。李(Lee)にとって、生心は人間の心にある知性とか、感情とか意志といったより高い機能に由来するものであり、個人の精神的な部分を構成しているものである。

『人間の心には、生心と肉心の両方における知性や感情、意志の機能が統一されており、知性や感情、意志も同じく統一されている。この知性、感情、意志の統一は「靈的統覚(spiritual apperception)」と呼ばれる。この靈的統覚が人を精神的な生き物にしているのである・・・』(9)

李は靈体の存在をどのように考えればよいのかについては述べていない。これは統一思想が現時点で、靈的な存在を直接扱っていないためである。統一思想が靈界を扱っていないことを認識して、文先生は統一思想にもう1つの章を付け加えることを願われた。

何人かの人達がこれに挑戦し始め、いくつかの出版物が出されている。アンドリュー・ウィルソン (Andrew Wilson) はこの分野でいくつか興味ある貢献をしている。「統一思想における靈的世界と靈人の存在論についての研究」と名付けられた論文では、多様な靈的証言から選び出された靈界の存在の特徴について述べている。この文献から取った靈的世界の特徴の全文を付録1に付けた。これらの特徴は、宗教的慣例が異なっている人々からの直接的な靈的体験から得られる靈的な存在の認識についての共通要素が反映されているために、特に有用な指針となっている。それらは特定の神学的見方に縛られたものではない。それら10個の特徴から、この発表に特に関連した靈的存在について、さらに2つの一般的事項を抽出できる。その第一は、靈的存在はある具体的な存在であるということである。靈界における人間は実体世界におけるのと同じように見たり動いたりするのであり、靈的世界を感じる五感に相当する感覚があるということである。ウィルソンはまた、物質は靈的な存在に帰結するという文章も引用しているが、彼自身の書いたものとしては少し物足りない。第二の一般的事項としては、環境それ自身や、動物、植物、いくつかの通信形態や移動形態、さらには思考や意識から誘導される靈人の出現といった心の役割に関するものである。ウィルソンは、例えば、「花や木は種から成長しないが、それらの生み出す技術を訓練された靈達によって作られる。」と言う。

しかしながら、これら2つの一般的事項は、完全に相互に両立できるものではない。2番目の事項は、思考や意識を巡らせると、無形の心としての精神についての伝統的な西洋的観点とは矛盾がない。しかしながら、それは(以下参照)具体的な存在と両立するためには難しい要素を含んでいる。これらの事項と精神的存在についての明瞭な描像とを結合することは簡単ではないが、統一の見地から存在論を理解する神髄があることを私は信じている。とりわけ必要とされるものは、具現化された靈的存在が何を意味す

るのかを理解することである。

### 3. 霊体 (Spiritual Body) とエネルギー

まずはじめに、霊体の概念をとりあげよう。これは、体や空間的広がり、量、可分性についての属性が、精神的存在にも適用される必要があることを意味する。言い換えれば、ウィルソン (Wilson) の研究がそれとなく言及しているように、霊的領域での物質の存在を仮定することになる。こうして、唯物論者でありながら霊を信じるとか、宗教的でありながらも心と体の二元性を否定するということが起こりうる。哲学的には、これは非常に重要な1つの結論となっており、二千年以上も変わらなかった無形の心と精神との同等性が破綻することになる。この基本的なパラダイムの転換は、統一原理 (Divine Principle) にある四重構造、および心と体 (性相と形状) が両方の霊的領域と物質領域の両方で見いだされるという解釈を、いっそう自由に評価できるようになる。統一思想自身は主に伝統的な精神と物質の概念を用いているので、統一思想で見いだされる性相と形状の記述は再評価され、この新しい見地から発展させられる必要があることを意味する。

この概念的な変更は科学と神学の間での存在論的ギャップに対しても重要な意義を持っている。精神的な存在に対して物質的な側面が暗示されることによって、ひょっとしたら実験で観測可能であるかもしれないが、実際にはまだ実行できていない霊的領域の研究を、自然科学の下で正当に調査できるという方向に向かうことができる。このことは自然科学と宗教の間に現在存在する断絶をなくすか、あるいは少なくとも橋を架けることになる。さらに、自然科学の歴史を通じて発展してきた物質的存在についての科学的な理解を、精神的な存在に拡張することも可能となる。

自然科学の発展の鍵となった1つがエネルギーの概念である。第15回 ICUS 会議において発表された論文の中で、Bent Elbek(11)は、いかにエネルギーがすべての科学的な理論の中心に存在する統一的な概念であるかを述べている。エネルギーは、科学の基本的な概念や科学的な方法の操作の結果ではなく、絶えず発展している理論における中心的概念として現れている。Elbek は、力学に初めて登場する記述から熱力学、そして現代の相対性理論や量子力学にいたる発展の跡をたどっている。エネルギーが科学的な記述のどこにでも存在するという事は、エネルギーが物質的存在の基本的な必要条件となっているという結論になる。多くに人がさらに一歩進めて、エネルギーはどんなタイ

プの存在にも基本的な必要条件であり、従ってエネルギーなしには存在することすら出来ないと結論が示される。もととなった自然科学に反して、唯物論が変わるのはここからである。

このすべての科学的な説明を通じて変わらないエネルギーの一側面は、エネルギーが正確に何であるかを突きとめることは不可能であるということである。Elbek は、何か他のものでエネルギーを記述するいくつもの方程式があることを指摘している。例えば、運動エネルギーは粒子の質量と速度から計算されるし、位置エネルギーは場の中の粒子の位置から計算でき、熱は物質中にある粒子の運動エネルギーの統計的平均であり、放射エネルギーでさえ光子と呼ばれる光の粒子のエネルギーである。我々は、エネルギーの1つの形態がどのように別の形態に変換されるかについても非常に詳しく理解しているが、エネルギーを何らかの存在する「もの」としては定義することが出来ない。わかっていることは、どんな形態であれ、エネルギーは常に、種類ごとの物質の粒子に附随するとか、その性質の一つであるとか、粒子そのものであったりする。エネルギーの定義に最も近いものは力学から導かれるもので、物理学の学生が始めに教えられるものである。ここでエネルギーとは単純に「仕事をする容量」と定義される。通常述べられていないが、暗黙的に、この「容量」は、ある物体あるいは粒子に附随したもの、あるいは物体や粒子そのものである。

しかしながら、自然科学が明確にしていることは、エネルギーにはない1つのこと、つまり、エネルギー自身、物質ではないということである。エネルギーは、それを計算することができる物体や粒子とは独立に存在したり意味を持ったりすることはない。アインシュタインの有名な方程式  $E=mc^2$  の時以来、自然科学でもエネルギーと質量(12)は等価であり、可換であることがはっきりした。こうして、物質はエネルギーであると言うことが完全に受け入れられるとともに、重要なことは、エネルギーは物質であるということである。我々がしてはいけないことは、エネルギーを物質として取り扱ったり、物質がエネルギーから作られると言うことである。これは難解な部分で、誤ってとらえられやすいが、エネルギーは、それに附随する物質的粒子とは独立にある種前もって存在しているということである。科学的には、実体のないエネルギーは存在しないのであり、ある意味、古代哲学における形を持った元素(prime matter)のような物質を形作るものである。霊界と信仰とを結び付けるこの種の考えは(自然科学の観点からは)無意味な概念、例えば、エネルギーを、それに附随した粒子や物質の振動準位に前もって割り

当てるとか、ともかく霊的領域に対して、より高い「振動準位」のエネルギーを持たせるとかいうようなことになってしまう。現代の精神的思想によって、これと関連した方法でエネルギーを物質として取り扱うことはエネルギーの概念を誤用することになる。

物質的な存在はエネルギーを包含しているので、物質的な構成要素で霊体に関連づけると、霊的領域を含むエネルギーの概念に拡張せざるを得なくなる。しかしながら注意しなければいけないことは、エネルギーを物質として取り扱わないという科学的な見地を保持することである。こうして、精神領域でのエネルギーはより高い振動数を持っているとか、エネルギーが実体世界よりも素晴らしい階級であるとかは、言うことはできない。ある意味、それがどんな形態をとるとしても、エネルギーはただエネルギーであるというだけでそれでおしまいである。このことは、物質領域から発展させられたエネルギーについてのまったく同じ科学的な考え方を、霊的領域の概念に移行することを可能にする。このエネルギーはある種の粒子あるいは粒子そのものに関連づけられなくてはならず、そしてそれらの粒子は恐らく現在科学で分かっているものとは異なったタイプのものであるというのが、第一の結論である。

第二に、物質領域についていくつか観察可能な結果があることを期待すべきである。エネルギーと質量は等価なので、霊的領域におけるエネルギーは質量と同等であろうし、少なくとも物質領域におけるいくつかの重力効果が見えることを期待すべきである。科学はまだこのような効果をはっきりとは認識していないけれども、物質世界についてのまだ解かれていないいくつかの深い謎がある。特に、我々が通常知っている標準的な物質は、観察可能な宇宙におけるエネルギー密度のたった5%ほどしか含んでいない。他の95%はダークエネルギー（暗黒エネルギー）とダークマター（暗黒物質）に分けられる。ダークという言葉は、それらの効果を間接的に観察することができるけれども、物理学者が何であるか分からないために使われている。ダークエネルギーは物質宇宙の膨張が加速していることに責任がある。それは現在、宇宙のエネルギーの70%を説明すると考えられている。ダークマターは、観察される宇宙の凝縮や銀河の運動から必要とされるものである。それは宇宙におけるエネルギーのおよそ25%を説明する。

霊的領域の大規模な宇宙論的効果が、通常物質について観察されるかもしれないような未知の成分として現われるだろうと想像することは可能である。これら2つの中で、ダークマターは最も研究されてきたものであり、私にとっても特に面白いトピックスである。宇宙でのその分布は、星や銀河および銀河集団について観察された運動から推論



して地図に表わすことができる。特に、宇宙におけるすべての物質をつなぐ大規模な「web (クモの巣)」となっている銀河や銀河集団を結ぶフィラメントからなるダークマターの「ハロー (後光)」や球面に、それぞれの銀河が埋め込まれていると考えられている。ダークマターについてのいくつかの理論はあるが、ただ最も一般的に受け入れられていることは、通常物質とは唯一重力を通してのみ相互作用するいくつかの未知の粒子から成っているということである。霊的領域の証明にはならないけれども、ダークマターの存在は、科学的な世界観で、エネルギーや粒子を含む霊的領域を見る余地があることを示している。(13)

#### 4. 心と物質の問題

エネルギーについてのいくつかの基本的な解釈は熱力学の法則に現れている。これらの法則は生命体を含むすべての物質的存在に適用される。今、もし我々が霊体すなわち精神的存在についての物質的／エネルギー的成分を仮定するなら、エネルギーについてのこれら基本的解釈が同じように適用されるであろうということを疑う理由はない。手短かに最初の2つの法則を概観しよう。

第一法則はエネルギー保存を扱っており、エネルギーは1つの形態から別の形態に変換することができるが、エネルギーが生成したり消滅したりすることはないというものである。従って閉じた系、すなわちエネルギー的に孤立した系では、エネルギーの量は一定でなければならない。宇宙が閉じた系であるかどうかは未解決の問題であるが、多くの人は宇宙が閉じた系であると仮定しており、そうすると宇宙のエネルギーは一定であるということになる。十分なエネルギーの入力があれば、エネルギーと質量が等価であるということから、物質的な粒子の生成ですら可能であるということができる。これは、粒子の流れが光の速度付近まで加速され、粒子どうしが衝突するというような大きな加速器の中で起こる。衝突時、衝突する粒子の運動エネルギーは多数の他の粒子に変換される。

第二法則は宇宙のエントロピーが自発的には増加する傾向があることを述べている。エントロピーとは、系のエネルギーの内、仕事に変換できないエネルギーの大きさである。(14) 熱力学は統計力学の1つであるから、宇宙全体のエントロピーは増大するけれども、局所的な部分では、外からのエネルギーの入力があればエントロピーの減少は可能である。こうして、地球上では、エネルギー移動やエネルギー変換が相互に結合し

絡み合った非常に複雑な生命系を可能にしているのは、太陽からのエネルギーがあるからである。これは、太陽のエントロピーの増加が、地球上のエントロピーの減少を埋め合わせる限り可能である。生命体もまた行動し、成長し、存在を維持し続けており、生命を維持するためにエネルギーを取り続けなければならない。しかしながら、宇宙全体のエネルギーは変わらず、エントロピーは全体として増大することになる。この第二法則は、時間が明らかに方向性を持っていることを自然科学で説明できる唯一の道でもある。これらの法則は、エネルギー変換やエネルギーの仕事へ変換を決定するものであり、エネルギーに満ちた霊的領域を含めて広く一般に応用できるものでもある。

これまで、ウィルソンの研究から引き出された精神的な存在とそれに附随する性質についての一般的な内容を主に扱ってきた。これは、霊体というものから引き出される一連の論理思考から、物質やエネルギーや何か素粒子のようなものを暗示することになるし、精神的存在が持つある種の素材が必要になる。次に、心や意識の役割を含んでいる二番目の内容を考えていくことにする。これら心の役割を取り扱う点では、精神的存在を物体で表現することはやや作り物のようになるが、心によってモデル化されて現れるものである。こうして、人間の思考はただちに動きを誘発したり、植物や動物を創造するように物を具現化したり、霊人の出現を変化させたり、人間の意識に反映して環境でさえも変化させられる。例えば花を考えてみよう。花は人間の意識の外には精神的に存在していない。植物や木は霊的領域では種から繁殖しない。従って、花も人間の心の作用を通して意識的に作られるものである。それでもなお、花はその時生命と形を持った存在なのである。花は摘み取られても枯れることはないし、物質的領域での様に腐敗することもないが、どちらかと言うと次第に消えていって、やがて姿を消す。ウィルソンの記述によれば、花は粘土で作ったもののような周囲に作り出された「もの」ではない。むしろ、花の形が、心の作用を通して、希薄な「空気」の中や外に現れたり消えたりするようなものである。

霊的領域で物が存在するというをそのまま受け入れると、精神的存在についての二番目の一般的記述で問題に出くわすことになる。熱力学第一法則と質量とエネルギーが等価であるということを用いると、形を持った花を作るのに巨大な量のエネルギーが必要となるし、花が消滅していく時には巨大なエネルギーを放出することになる。

(15) これは、霊的存在に関係した粒子のエネルギーが非常に小さい（低質量）のであれば正しいであろう。そうでなければ、必要となるエネルギーはありそうもないほど大

きくなってしまう。例えば、核爆発は大量のエネルギーを解き放つが、それは原子の質量のほんの一部を、生成する粒子の運動エネルギーに換えているだけである。生成したり消滅したりする花が持つ物質の量は、核爆発と比べ物にならないほどはるかに膨大なエネルギーを含んでいることになる。霊的な花が静かに消えていくというよりはむしろ、もしそれが姿を消す時には、霊的な花は巨大な力で爆発することになるからである。

精神的存在における心的関係についての別の側面では、ウィルソンも熱力学第一法則が破綻することを述べている。思考によって環境が変わっていくとか、物体が動くとかいうたぐいのことは、そこに含まれているエネルギーや粒子が存在するのに、ありそうもないほどの量のエネルギーを伴うことになるからである。熱力学第二法則もまた、この種の存在にとって難題となる。物質領域においては、局所的なエントロピーの減少を伴う生命は、太陽から入ってくるエネルギーによって許されている。生命を維持し、低いエントロピーを維持するために、食べたり飲んだりするという食物連鎖を通して、太陽のエネルギーが変換されている。精神的存在におけるエネルギーと粒子でも、霊的な物体それ自身や心の中に秩序付けられた環境も、非常に大きなエントロピーの減少を反映したものとなるであろう。では、熱力学第二法則によって要求される全体としてのエントロピーの増大はどう説明したらよいのだろうか？ 熱力学の観点からすると、ウィルソンが指摘している精神的存在についての2つの一般的な記述は相互に共存できるようには思えない。具現化された精神的存在は、人間の思考における精神的存在の柔軟性と矛盾するように思われる。

## 5. 霊体を再定義すること

### 5.1. ウィルソンの単層的モデル

精神的存在に伴うエネルギーを考慮すると、ウィルソンが述べている精神的存在についてのあらゆる点を説明する上でいくつか概念的な困難に直面する。もちろん、我々はエネルギーの問題を解決するために神を含めることができるが、霊的な感覚での物体の存在が意味することを再定義することの方が、よりもっともらしく有益であると思う。ウィルソンはまた、霊的世界での物体の存在と心的現象の間に同じ問題を認めており、まさにこの問題を解決するための道を彼は探っている。彼はこれを、精神的存在が単層的であることを提案することによってなそうとしている。(16)すなわち、それは我々が

物質的実体物で見いだすような階層構造を持っていないということである。

物質領域で花を作り出すことは、時間を通じた進化の見地からしても、瞬間における構造的見地からしても、多くの層を必要とする。構造上、1つの花は素粒子、原子、分子、細胞などの層で構成されている。もし物質領域でその花を摘むなら、その細胞はもはや必要とする入力エネルギー（栄養）を受け取れず、やがて死んでしまう。その後、花は微生物や酸化の作用を受けてゆっくりと朽ちることになる。存在の持つエネルギーと物質はリサイクルされて、分解した花とは別の形態のものに変換される。これはもとの存在が多層的な性質を持っているために可能であり、花の死は、それを構成しているすべての下層の物質が失われるのではないことによる。他方、単層的な精神的存在は非常に異なった振る舞いをするようになる。花はすぐに出現することになる。花という物体は霊的な素材が存在することによって出来ているのではないし、花という物質を構成する原子とか素粒子というような層もないであろう。従って、花が摘まれ、それが「死ぬ」という時に、残存する低レベルの組織だった物質というものはなく、花が作られるのとは逆の過程で単に花全体が姿を消すことになる。こうすると問題を巧妙に解決したことになるが、それ自体概念的な困難がなくはない。ではまず、これが物体の概念をどのように再定義するのかを見ることにしよう。

物質領域での物体の標準的な概念は、空間的な広がりや、可分性、量を含んでいる。量とか「もの」の大きさといったものは、現代の見方からすれば、質量とそれに等価なエネルギーを意味する。つまりこれはすでに見てきたように、ある種の物質的粒子を暗に含んでいる。物体が単層的であるという概念は、必然的にまだ、空間的広がりを含んでいるのであり、具現化された精神的存在には空間的広がりが含まれているということにはかわりはない。次の特質である可分性については、物体の単層的概念では失われている。可分性は物質的存在の階層構造を必要とする。何かが可分であるためには、それ自身の存在を維持することができるものに分けられるということであり、このような部分があるなら存在は単層的ではない。従って、単層的な花は、摘み取られることによって分割される時には存在が終わるのであり、単に消滅していくことになる。可分性のこの特質は、単層的物体の概念とは完全に異なっており、精神的存在における物体を再定義するというウィルソンが立てたモデルが成功した部分の要となっている。3つ目の性質である量は、この単層的観点では最も問題となる所である。問題は何が物体をなしている「もの」であるのかということである。

単層的な霊体としての「もの」を扱う際に、まずポイントとなることは、それには量があるのか？ということである。もし否と答えるなら、精神的存在が無形の物でエネルギーのない（検知できない）ものということになり、ほとんどふりだしに戻ってしまう。しかし空間的広がりには付け加わっている。この場合、科学と宗教の間の存在論的な分裂は厳しく残ったままである。もし「はい」と答えるなら、ウィルソンが示しているのと同じく、物体はエネルギーを伴わなくてはならない。この答えの方が望ましいけれども、単層的な存在物に伴うエネルギーというものの概念的な問題に立ち至ってしまう。特に、すでに上記で触れた2つの重要な問題がある。その第一は、霊的な花を創造したり消滅させたりする際に、ありそうもなく大きい量のエネルギーが必要になったり、エネルギーを作り出したり消滅させたりするということは、熱力学の法則に反するということである。その第二は、物質としてエネルギーを扱うことに関係している。人間の精神は言うまでもなく、具現化された花は、比較的複雑である。ウィルソンが示唆していることは、単層的な存在における複雑さは、花（あるいは人間）に対するロゴスに見いだされる。(17) しかしながら、単層的な存在における素粒子や原子には層がないので、複雑なロゴスは直接何かにパターン化されなくてはならない。これを行う唯一の方法は、もし量（エネルギー）を持っているなら、エネルギーを、形態を受け取ることができる物質と見なすことである。しかし、このような方法では、まだエネルギーを見ることができないことはすでに示した。

従ってウィルソンの提案は、物質的存在から導かれる物体について、単純な概念を採用することを妨げている同種の議論にぶつかってしまう。問題はウィルソンの論理ではなく、むしろ彼が暗黙のうちに採用している物心二元論である。他のところで示すように(18)、性相と形状という統一思想の基本的な構造は、古代ギリシャ哲学の中に見い出される形相(form)と質量(matter)の概念から導かれている。ここでのロゴスは物質の根本となる本形状 (Original Hyungsang) やプラトン哲学的な形相(form)に対応している。私はその研究で、こうしたギリシャ哲学の連続性が、原子理論や量子力学から導かれる存在物についての不連続性とはどのように両立できないのかを示している。ここで、ギリシャ哲学もまた、エネルギーの科学的な考えや熱力学とは完全な互換性がないことがわかる。

## 5.2. バーチャル・リアリティーとしての精神

必要なことは、統一思想に基づいた精神的存在に適用される物体についての新しい定

義であり、これは自然科学やウィルソンの10の指摘と両立できるものでなければならぬ。最初の出発点は、物質領域での意識的な知覚は、認識の元となる存在論的な実体を常に反映するわけではないという事実である。例えば映画を見ているとしよう。我々が知覚するスクリーンの上に絶え間なく動いているものは、実際には連続したスチール写真であり、我々の認識は実際に起きていることとは非常に異なっている。ウィルソンの指摘は確かに霊的領域での認識を反映したものであるが、それらは必ずしも存在論的な実体を反映したものではない。別の出発点は、自然科学への橋渡しをするために、潜在的に観測可能となる理論が必要であるということである。すなわち、精神的存在と関係したある種の粒子やエネルギーについての概念は保持すべきである。こうして問題は、霊体が意味するものをどのように再定義できるのか、認識や精神的存在についてのある種の物質的成分とどのように矛盾しないのか、ということになる。

答えは、統一思想で発展させられた心というものを理解することによって導かれる、と私は信じている。私の以前の研究(19)で心(性相)のモデルを提案したが、そこではギリシャ哲学の思想から導かれるような別のもののようにには取り扱わない。そのモデルは原相(Original Image)の二段構造から発展したものであり、内的機能面と内的情報面との間の関係からなる内的四位基台として心が存在することを示唆している。さらにその関係は脳と体の物質的構造としてパターン化され、独立した実体のない存在を持つことはあり得ない。ある意味で、心と体は共に1つの物質であって、二つのものではない。

さて統一思想においては、宇宙意識と呼ばれる非常に興味ある概念があり、それは宇宙の性相とか、生命場とか、意識の場というように、様々に記述されている。(20) しかしながら、それは明確に定義されたものではなく、存在についての基本的で重要なことであるにもかかわらず、十分な記述がない。例えば、すべての認識は細胞のレベルにおける原意識(protoconsciousness)から始まると言われており、それ自身も宇宙意識から導かれるものである。もちろん、李(Lee)先生は宇宙意識を別の実体として扱っているけれども、ここで手短かに述べた二段構造を適用するならば、宇宙意識を宇宙の物質的な粒子にパターン化された内的四位基台と見なすことができる。すなわち、宇宙は全体として、宇宙の物質的粒子である1つの実体と結びついたある種の心を持っている。3次元のクモの巣状にあるすべての標準的な物質を結んでいるダークマター(暗黒物質)について観測されたパターンは、特にこの可能性を示唆するものである。

こういった宇宙の見方があれば、霊的領域は、コンピュータでシミュレートしたバー

チャル・リアリティーのようなものであるか、巨大なコンピュータのように一部機能している宇宙心の中での鮮明な心的映像になっている。人間の精神は、ローカルな仮想環境を再編成することもできる能力を持つ宇宙心の内的性相と内的形状内での自己認識プログラムや意識的な記憶に、より似通っているといえる。言い換えれば、霊体での認識は、独立した実体として存在するというよりは、むしろ宇宙心の内的形状内において、心的映像やプログラムや記憶から生じる架空の結果である。従って、物質的存在から導かれる物体の定義は直接適用できないことになる。しかしながら、バーチャル・リアリティーそれ自身、実際、全体として宇宙心であり、ちょうど我々の肉心が脳の物質的なパターンに基づいているように、宇宙心は物質的粒子の上に置かれたパターンに基づいている。一見して、このようなことは全くのサイエンスフィクション的なアイデアのように思われるかもしれないが、精神の性質について現存する考え方における概念的な問題の多くがこれによって解決される。

第一に、この提案では、完全に実体がなくエネルギーがないような心を扱ってはいない。宇宙や心の発展を科学的に理解できるような、いずれ実験的に確認される可能性を持つ何かである。科学と宗教の間の存在論的ギャップは潜在的に統一思想から導かれた理論によって橋渡しされる可能性を持っており、それがこの研究の本来の意図の一つであった。第二に、この提案は、ウィルソンの10の指摘から引き出された精神的存在についての2つの一般的な内容と矛盾しないし、エネルギーと熱力学における科学的な理論を否定するものでもない。物質とは独立に存在することはないある種の仮想的領域内での存在物の認識を意味する具現化された精神的存在を再定義した。また、精神をバーチャル・リアリティーとして取り扱うことによって、霊的環境で観察される可塑性から生じるエネルギー問題にも出くわさない。例としての花の心的映像を作るために、エネルギーは実際に必要であるし、説明されなければならないが、花という何か物質的なものを創造するのに途方もないエネルギーが必要であるということに比べれば、必要なエネルギーというのはあまり重要ではない。この提案は、食べたり飲んだりする必要がないとか、再生することはできないとか、明白な永続性とか、天使とか、さらには思考のスピードで旅行するというような、ウィルソンによって報告された精神的存在についての他の側面をも説明するであろう。

付け加えると、精神的な存在の単層的性質を、外的な実存体としてよりも、むしろ宇宙心の内的四位基台に再編成させるならば、この提案はウィルソンの単層的モデルを包

含することになる。最後に充分興味深い事として、この提案は精神と物質についての統一思想の現在の分類を支持するものである。統一思想は精神的存在を取り扱っていないけれども、精神は認識論的概念を用いて取り扱われており、一方、存在論では物質的存在と神に限定されている。ここで提案されたモデルでは、心と物質を別のものと見なすのではなく、心的現象として精神の概念を保つことができるのであり、宇宙全体を含む心的現象に拡張することができるのである。

## 6. 結論

この研究の本来の趣旨は、霊体とそれに関係した物質的要素の概念を、具現化した精神的存在に付け加えることによって、自然科学と宗教との間の大きな隔たりを橋渡しすることであった。精神と心が等しいとすることから離れることに意図があった。意外にも、霊体についての単純な概念は、精神的存在を認識した報告とは両立できなかった。もしウィルソンの10の指摘を受け入れるなら、もう1度心を中心に展開する精神についての概念に戻って堂々巡りをしなければならなくなる。しかしながら、それは非常に異なった心の概念である。宗教と科学の間の存在論的問題は、心と精神が実体のない非エネルギー的なものであるというギリシャ哲学から導かれた概念に由来しており、結果として物心二元論に至る。この二元性を放棄することによって、統一思想の構造から得られる心の概念が可能になるのであり、心と体が1つの存在の不可分な局面であることが示される。

これを理論的な出発点とし、二段構造と宇宙意識の概念を組み合わせることによってモデルが提案される。明らかにこれは我々が物質的宇宙について現在知っていること以上の物理学を必要とすることになるが、ダークマターやダークエネルギーは現在の我々の理解が不完全であることを示している。精神的存在に対する物体を再定義することから始めて、最終結果としてはどちらかと言うと心を再定義することであり、物質的存在に固く結びついている物体についての伝統的な理解はそのままにしておくことにする。心は、ちょうど物質的な人間の中にある、むしろ物質とエネルギーを含む材質的な心なのであり、霊的領域は、統一思想の言葉では宇宙意識と呼ぶ宇宙心の思考過程となっている。霊的領域は、心的映像やコンピュータによってシミュレートされた仮想的な環境に相当するバーチャル・リアリティのようなものであって、霊的な経験として報告されている具現化した精神的存在は、夢を見ている間に存在する物体を覚知することに相



当する存在物についての心像となっている。それにもかかわらず、人間の精神は、意識的に仮想的環境に影響を与えるという点でも、この仮想的な世界において完全に意識が関与している。

最後に述べるべき問題は、この宇宙心と神との間の関係である。統一思想が与えているヒントは、宇宙意識は実際、神の意識であるということである。(21) 思考の構造を眺めてみると、恐らくすべきことは最も単純なことであるが、神学の見地からは多神教に向かう傾向になってしまうであろう。特に間違っはいけないことは、ここで用いた存在の二段階モデルであって、心と体は2つに分かれた存在ではないということである。神学的には、創造された領域として霊的領域と物質的領域の両方を取り扱う。もし仮に宇宙意識が物質的粒子を持つ1つの物質であるなら、宇宙意識は神に対して作られた対象であるということになり、神は精神的存在と物質的存在の両方の外側に位置しているということになってしまう。

1. Claude Perrottet, 「西洋哲学の伝統における霊的実在の理解に対する概念的な障害」、2003年11月27-30日、モスクワで行われた第15回統一思想国際シンポジウム「科学の統一と統一思想」議事録
2. David Burton, 「物質とは何か：統一思想、粒子物理学、および変化の本」(統一思想研究院、東京、2005) 11-20.
3. 「統一原理解説」(成和出版社、ソウル、1996) 45.
4. 同上。 47-51.
5. 李相憲、「統一思想要綱」(統一思想研究院、東京、1992) 93.
6. 「原理講論」17.
7. 「新版統一思想要綱」では、霊体については、原相論、存在論、本性論、認識論の各章で一度だけ述べられている。
8. 李相憲、「統一思想要綱」(統一思想研究院、東京、2005) 34. ここでは、旧版ではっきりと述べられなかったことを明らかにしている。つまり、性相と形状は2つのものと見なすことが、これは原相でも正しい。しかし原相では、性相と形状は一つに統一された源から生じていると見られる。
9. 同上。 90.
10. Andrew Wilson, 「統一思想における霊界と霊人の存在論への研究」、統一研究ジャ

ーナル、5(2003):145-174.

11. Bent Elbek, 「複雑さが増大する系におけるエネルギー概念の発展とその役割」、1986年11月ワシントン D.C.で開催された第15回科学の統一に関する国際会議議事録。Burtonにより採録「物質とは何か」115-140。
12. 質量(mass)は物質の量の尺度である。まだ、例えば、陽子や中性子の質量の大部分はそれらの成分であるクォーク(quarks)から来ているのではなく、強い核相互作用を介したクォーク間の相互作用による運動エネルギーと位置エネルギーから導かれたものである。
13. ひも理論でも、四次元空間で少ししか離れていない2つ（あるいはそれ以上）の三次元的宇宙があるという面白い別の説明をしている。この記述では、各宇宙にある粒子は重力粒子（グラビトン gravitons）を除いてその宇宙に固定されているとしている。ダークマターは近くにある宇宙の重力効果を受けると期待される。しかし、ひも理論はまだ実験的証明が得られていない。
14. エントロピーはより一般的には、系の乱れの尺度として表されているが、エネルギーを扱っているので、ここでの定義の方がいっそう適切であると思われる。最も単純に仕事とは、作用している力に距離をかけたものである。
15. 我々はエネルギーについて話をしているので、これは粒子-反粒子の対として粒子が実際に創造されているという議論はしないでおく方が簡単である。こうした粒子物理学の側面を考察すると、精神領域における物体の存在についてはじめから考察する状況をより悪くしてしまう。
16. Wilson、「存在論」152.
17. Wilson、「存在論」153.
18. Burton、「物質とは何か」38-51.
19. 同上。43-48.
20. 李相憲、「新版統一思想要綱」129-130,162,431.
21. 同上。431.

## 付録1：アンドリュー・ウィルソン(Andrew Wilson)による精神的存在の10の特徴

1. 物質世界(physical world)と精神世界(spirit world)の間には連続性がある。霊界(spirit world)の人々は具体的な形を持った存在として生きており、あらゆる生活活動を行

っている。スウェーデンボルグ(Swedenborg)は次のように書いている。

『死んだ後の人は以前生きていたのと同じ人であり、その人は前世にいないことにまだ気付いていないかのようなのである。前世と同じように見たり聞いたり話したりするし、横たわって眠ったり目覚めたりする。そして、食べたり飲んだりするのも同じである。人は前世のように結婚を喜びを楽しむ。この世界でも、一人の人間として尊重されている。』

2. 霊界(spirit world)でのエネルギーは神から直接流れてくる。それは輝く愛の太陽のように照らし統治している。これは物質世界と非常に異なっている。物質世界では、生活を維持するためのエネルギーは、日光や、空気、水、土といった物質から供給される。文先生の教えによると、物質世界での生命は空気や水や地球によって養われているが、「霊界では愛を中心として息をし生活している。」また「霊界の空気は地球上の空気とは違っていて、それは愛である。」とおっしゃっている。李博士は神の力が直接天使をコントロールしていることを見い出した。そこでは「組織や、システムや活動は、直接神の心の電気スイッチに直結している。」霊界での位置は、その人がどれくらい近く神の愛と共鳴しているかに極めて依存している。
3. 霊的な証しがしばしば述べていることは、霊界は思いの世界であり、考えればすぐに実現するし、考えを通してコミュニケーションが起こる。そして自分の考えが直接行動を誘発するし、物が出現したりする。
4. 生き物の外見上の形がその物質構造によって主に固定している物質世界と異なり、霊界では、形はもっと柔軟であり、心の中の特徴を反映している。李博士によれば、天使は思うままに容姿や大きさを変えることができる。年老いた人が霊界で真ん中に到着すると、その人が持っていた人生の盛りの姿になる。悪魔が生き返るように、その人の姿はもっとはっきりとした人間になる。
5. 形が可変であるにもかかわらず、人間と天使は変わらない実在として永遠に存在する。地獄にいる霊は繰り返し繰り返し殺されることができが、しかし決して死なない。
6. 霊(spirit)が存在する領域によって、霊の周りを包んでいる形を持った霊体(spirit body)は様々なレベルの濃さ(denseness)にあるとも言えるかもしれない。地上に拘束された霊は星気体(astral body)に身を包んでおり、それは霊界の高い水準にいる希薄な体を持った霊に比べてかなり密度が濃い。

星気(Astrals)は・・・地球を作っている物質と霊界におけるエーテル的な物質戸の間意の中間的な実体であり、地上に束縛された条件を表すために星氣的な覆いで魂を包むという表現をしている。

一般に、霊体はそれが住んでいる領域に適した要素で構成されている。霊体と周囲の環境との間には相関があるように思われる。霊の形は、服や家や周囲の土地といった霊の環境に広がっていると言うことができる。低い霊界では、霊体と周囲と一緒に動いていて、刑務所に閉じ込められているかのようである。霊が古い体を脱ぎ捨てて、より高い霊界に復活する時には、魂の抜けがらはその霊界の元素に分解される。そして、霊は新しい体を身につける。

7. 物質世界と異なり、霊界では繁殖がない。しかし、このようなことは、思考についても同じであり、イメージを複製して作り出し、別の心とコミュニケーションできても、思考自身を複製することはできない。繁殖には物質的な形を持った陽陰(yang and yin)エネルギーの相互作用が必要である。陽陰はまだ天使（四位基台を完成した人よりも前の霊界）の間では働いていないように思われる。花や木は種から成長しないが、それらを生み出す技術を訓練された霊によって作られる。
8. 人間は霊界で環境の共同創造者である。それは前世の間になした質や条件に支配される。統一原理(Divine Principle)では生力要素(vitality elements)について述べており、それは霊の成長に必要な食物にあたる。文先生によれば、地上の生活は霊界に行って住む「家」を決定するのであり、それが、天国と地獄のどちらに住むのかを決定する本質であるという多数の霊的な証しがある。
9. 動物や植物や生命のない物体は永遠に存在するのではなく、ただそれらを大事にする人がいる限りにおいてだけ存在する。霊界では熟したプラムを食べると、ジュースが流れ出て消えてしまう。Borgia は次のように述べている。

『もしあなたがもう必要ではないとか、もういらないと思えば、すべて現れたものは単に次第に消えていき、ちょうどあなたの前に目でなくなってしまうでしょう。けれどもそれは失われたわけではなく、それは元あった所に戻っただけです。もしこの家もすべての中身も欲しくなかったなら、それは消えてしまっただけで、何も見えなくなり、それが建っていた地面だけが残るでしょう。』

霊界の環境を美しくする木や花や他の物体は、そこに住んでいる人々のために創造されている。そこにいる動物や鳥もまた、その主人である人間のためにいるので

ある。

10. 霊通人の証によれば、霊界は様々な領域に分けられ、地球の「上」と「下」に同心円的に配置されている。この表現は、実際の空間配置は通常の三次元を超えたものである。この表現は、類似した表現をしたものである。しかし、これは単に墜落の結果である。時がたてば、復帰が完全になされ、すべての人々が完全に復帰されれば、すべての低級な層は溶けてしまうであろうし、霊界は天国の1つの大きな円として1つになっているであろう。